聖愚問答抄下　　文永五年　　四七歳

爰に愚人聊和いで云はく、経文は明鏡なり、疑慮をいたすに及ばず。但し法華経は三説に秀で一代に超ゆるといへども、言説に拘はらず経文に留まらざる我等が心の本分の禅の一法にはしくべからず。凡そ万法を払遣して言語の及ばざる処を禅法とは名づけたり。されば跋提河の辺り沙羅林の下にして、釈尊金棺より御足を出だし、拈華微笑して此の法門を迦葉に付嘱ありしより已来、天竺二十八祖系も乱れず、唐土には六祖次第に弘通せり。達磨は西天にしては二十八祖の終はり、東土にしては六祖の始めなり。相伝をうしなはず教網に滞るべからす。爰を以て大梵天王問仏決疑経に云はく「吾に正法眼蔵・涅槃妙心・実相無相・微妙の法門有り、教外に別に伝ふ。文字を立てず摩訶迦葉に付嘱す」とて、迦葉に此の禅の一法をば教外に伝ふと見えたり。都て修多羅の経教は月をさす指、月を見て後は指何かはせん。心の本分禅の一理を知って後は仏教に心を留むべしや。されば古人の云はく、十二部経は総て是閑文字と云云。仍って此の宗の六祖慧能の壇経を披見するに実に以て然なり。言下に契会して後は教は何かせん、此の理如何が弁へんや。

聖人示して云はく、汝先づ法門を置いて道理を案ぜよ。抑我一代の大途を伺はず十宗の淵底を究めずして、国を諫め人を教ふべきか。汝が談ずる所の禅は我最前に習ひ極めて、其の至極を見るに甚だ以て僻事なり。禅に三種あり。所謂如来禅と教禅と祖師禅となり。汝が言ふ所の祖師禅等の一端之を示さん、聞いて其の旨を知れ。若し教を離れて之を伝ふといはゞ、教を離れて理無く、理を離れて教無し。理全く教、教全く理と云ふ道理、汝之を知らざるや。拈華微笑して迦葉に付嘱し給ふと云ふも是教なり。不立文字と云ふ四字も即ち教なり文字なり。此の事和漢両国に事旧りぬ。今いへば事新しきに似たれども、一両の文を勘へて汝が迷ひを払はしめん。補註十一に云はく「又復若し言説に滞ると謂はゞ、且く娑婆世界には何を将て仏事と為るや。禅徒豈言説をもて人に示さざらんや。文字を離れて解脱の義を談ずること無し、豈聞かざらんや」と。乃至次下に云はく「豈達磨西来して直指人心・見性成仏すと。而るに華厳等の諸大乗経に此の事無からんや。嗚呼世人何ぞ其れ愚かなるや。汝等当に仏の所説を信ずべし。諸仏如来は言虚妄無し」と。此の文の意は若し教文にとゞこほり言説にかゝはるとて、教の外に修行すといはゞ、此の娑婆世界にはさて如何がして仏事善根を作すべき。さやうに云ふところの禅人も、人に教ふる時は言を以て云はざるべしや。其の上仏道の解了を云ふ時、文字を離れて義なし。又達磨西より来たって直ちに人心を指して仏なりと云ふ。是程の理は華厳・大集・大般若等の法華巳前の権大乗経にも在々処々に之を談ぜり。是

をいみじき事とせんは無下に云ひがひなき事なり。嗚呼今世の人何ぞ甚だひがめるや。只中道実相の理に契当せる妙覚果満の如来の誠諦の言を信ずべきなり。又妙楽大師の弘決の一に此の理を釈して云はく「世人教を蔑ろにして理観を尚ぶは誤れるかな、誤れるかな」と、此の文の意は今の世の人々は観心観法を先として経教を尋ね学ばず、還って教をあなづり経をかろしむる、是誤れりと云ふ文なり。其の上当世の禅人自宗に迷へり。続高僧伝を披見するに、習禅の初祖達磨大師の伝に云はく「教に藉って宗を悟る」と。如来一代の聖教の道理を習学し、法門の旨、宗々の沙汰を知るべきなり。又達磨の弟子六祖の第二祖慧可の伝に云はく「達磨禅師四巻の楞伽を以て可に授けて云はく、我漢の地を観るに唯此の経のみ有り。仁者依行せば自ら世を度することを得ん」と。此の文の意は達磨大師天竺より唐土に来たって、四巻の楞伽経をもて慧可に授けて云はく、我此の国を見るに是の経殊に勝れたり、汝持ち修行して仏に成れとなり。此等の祖師既に経文を前とす。若し之に依って経に依ると云はゞ大乗か小乗か、権教か実教か、能く能く弁ふべし。或は経を用ゆるには禅宗も楞伽経・首楞厳経・金剛般若経等による。是皆法華已前の権教覆蔵の説なり。只諸経に是心即仏・即心是仏等の理の方を説ける一両の文と句とに迷ふて、大小・権実・顕露・覆蔵をも尋ねず、只不二を立てゝ而二を知らず。謂己均仏の大慢を成せり。彼の月氏の大慢が迹をつぎ、此の尸那の三階禅師が古風を追ふ。然りと雖も大慢は生きながら無間に入り、三階は死して大蛇と成りぬ、をそろしをそろし。釈尊は三世了達の解了朗らかに、妙覚果満の智月潔くして未来を鑑みたまひ、像法決疑経に記して云はく「諸の悪比丘或は禅を修する有って経論に依らず、自ら己見を逐ふて非を以て是と為し、是邪・是正と分別すること能はず。遍く道俗に向かって是くの如き言を作さく、我能く是を知り、我能く是を見ると。当に知るべし、此の人は速やかに我が法を滅す」と。此の文の意は諸の悪比丘あて禅を信仰して経論をも尋ねず、邪見を本として、法門の是非をば弁へずして、而も男女・尼法師等に向かって、我よく法門を知れり、人はしらずと云ひて此の禅を弘むべし。当に知るべし、此の人は我が正法を滅すべしとなり。此の文をもて当世を見るに宛も符契の如し。汝慎むべし汝畏るべし。先に談ずる所の天竺に二十八祖有りて、此の法門を口伝すと云ふ事、其の証拠何に出でたるや。仏法を相伝する人二十四人、或は二十三人と見えたり。然るを二十八祖と立つる事所出の翻訳何にかある、全く見えざるところなり。此の付法蔵の人の事、私に書くべきにあらず、如来の記文分明なり。其の付法蔵伝に云はく「復比丘有り名を師子と曰ふ。罽賓国に於て大いに仏事を作す。時に彼の国王をば弥羅掘と名づけ、邪見熾盛にして心に敬信無く、罽賓国に於て塔寺を毀壊し衆僧を殺害す。即ち利剣を以て用ひて師子を斬る。頸の中血無く唯乳のみ流出す。法を相付する人是に於て便ち絶えん」と。此の文の意は仏我入涅槃の後に我が法を相伝する人二十四人あるべ

し。其の中に最後弘通の人に当たるをば師子比丘と云はん。罽賓国と云ふ国にて我が法を弘むべし。彼の国の王をば檀弥羅王と云ふべし。邪見放逸にして仏法を信ぜず、衆僧を敬はず、堂塔を破り失ひ、剣をもて諸僧の頸を切るべし。即ち師子比丘の頸をきらん時に、頸の中に血無く、只乳のみ出づべし。是の時に仏法を相伝せん人絶ゆべしと定められたり。案の如く仏の御言違はず師子尊者頸をきられ給ふ事、実に以て爾なり。王のかいな共につれて落ち畢んぬ。二十八祖を立つる事、甚だ以て僻見なり。禅の僻事是より興るなるべし。今慧能が壇経に二十八祖を立つる事は、達磨を高祖と定むる時、師子と達磨との年紀遥かなる間、三人の禅師を私に作り入れて、天竺より来たれる付法蔵系乱れずと云ひて、人に重んぜさせん為の僻事なり。此の事異朝にして事旧りぬ。補註の十一に云はく「今家は二十三祖を承用す。豈誤り有らんや。若し二十八祖を立つるは未だ所出の翻訳を見ざるなり。近来更に石に刻み版に鏤ばめ、七仏二十八祖を図状し、各一偈を以て伝授相付すること有り。嗚呼仮託何ぞ其れ甚だしきや。識者力有らば宜しく斯の幣を革むべし」と。是も二十八祖を立て、石にきみ版にちりばめて伝ふる事、甚だ以て誤れり。此の事を知る人あらば此の誤りをあらためなをせとなり。祖師禅甚だ僻事なる事是にあり。先に引く所の大梵天王問仏決疑経の文を教外別伝の証拠に汝之を引く、既に自語相違せり。其の上此の経は説相権教なり、又開元・貞元の両度の目録にも全く載せず、是録外の経なる上権教と見えたり。然れば世間の学者用ゐざるところなり、証拠とするにたらず。抑今の法華経を説かるゝ時益をうる輩、迹門界如三千の時敗種の二乗仏種を萌す。四十二年の間は永不成仏と嫌はれて、在々処々の集会にして罵詈誹謗の音をのみ聞き、人天大会に思ひうとまれて既に飢え死ぬべかりし人々も、今の経に来たって舎利弗は華光如来、目連は多摩羅跋栴檀香如来、阿難は山海慧自在通王仏、羅睺羅は蹈七宝華如来、五百の羅漢は普明如来、二千の声聞は宝相如来の記莂に予る。顕本遠寿の日は微塵数の菩薩、増道損生して位大覚に隣る。されば天台大師の釈を披見するに、他経には菩薩は仏になると云ひて、二乗の得道は永く之無し。善人は仏になると云ひて悪人の成仏を明かさず、男子は仏になると説いて女人は地獄の使ひと定む。人天は仏になると云ひて畜類は仏になるといはず。然るを今の経は是等が皆仏になると説く、たのもしきかな。末代濁世に生を受くといへども提婆が如くに五逆をも造らず三逆をも犯さず。而るに提婆猶天王如来の記莂を得たり。況んや犯さゞる我等が身をや。八歳の竜女既に蛇身を改めずして南方に妙果を証す。況んや人界に生を受けたる女人をや。只得難きは人身、値ひ難きは正法なり。汝早く邪を翻し正に付き、凡を転じて聖を証せんと思はゞ、念仏・真言・禅・律を捨てゝ此の一乗妙典を受持すべし。若し爾らば妄染の塵穢を払ひて、清浄の覚体を証せん事、疑ひなかるべし。

爰に愚人云はく、今聖人の教誡を聴聞するに、日来の矇昧忽ちに開けぬ。天真発明と

も云ひつべし。理非顕然なれば誰か信仰せざらんや。但し世上を見るに上一人より下万民に至るまで、念仏・真言・禅・律を深く信受し御坐(おわ)す。さる前には国土に生を受けながら争(いか)でか王命を背かんや。其の上我が親と云ひ祖と云ひ、旁(かたがた)念仏等の法理を信じて他界の雲に交はり畢んぬ。又日本には上下の人数幾(いくばく)か有る。然りと雖も権教権宗の者は多く、此の法門を信ずる人は未だ其の名をも聞かず。仍って善処悪処をいはず、邪法正法を簡(えら)ばず、内典五千七千の多きも、外典三千余巻の広きも、只主君の命に随ひ、父母の義に叶ふが肝心なり。されば教主釈尊は天竺にして孝養報恩の理を説き、孔子は大唐にして忠功孝高の道を示す。師の恩を報ずる人は肉をさき身を投(な)ぐ。主の恩をしる人は弘演(こうえん)は腹をさき、予讓(よじょう)は剣をのむ。親の恩を思ひし人は丁蘭(ていらん)は木をきざみ、伯瑜(はくゆ)は杖に泣(な)く。儒・外・内、道は異なりといへども報恩謝徳の教は替はる事なし。然れば主・師・親のいまだ信ぜざる法理を、我始めて信ぜん事、既に違背の過(とが)に沈みなん。法門の道理は経文明白なれば疑網都(すべ)て尽きぬ。後生を願はずば来世苦に沈むべし。進退惟谷(これきわま)れり、我如何せんや。

聖人云はく、汝此の理を知りながら猶是の語をなす。理の通ぜざるか意の及ばざるか。我釈尊の遺法をまなび、仏法に肩を入れしより已来、知恩をもて最とし報恩をもて前とす。世に四恩あり、之を知るを人倫となづけ、知らざるを畜生とす。予父母の後世を助け、国家の恩徳を報ぜんと思ふが故に、身命を捨つる事敢(あ)へて他事にあらず、唯知恩を旨とする計りなり。先づ汝目をふさぎ心を静めて道理を思へ。我は善道を知りながら親と主との悪道にかゝらんを諫めざらんや。又愚人の狂い酔ひて毒を服せんを我知りながら是をいましめざらんや。其の如く法門の道理を存じて火・血・刀の苦を知りながら、争(いか)でか恩を蒙る人の悪道に堕(お)ちん事を歎かざらんや。身をもなげ命をも捨つべし。諫めてもあきたらず歎きても限りなし。今生に眼を合はする苦しみ猶(なお)是を悲しむ。況んや悠々たる冥途の悲しみ豈(あに)痛まざらんや。恐れても恐るべきは後世、慎みても慎むべきは来世なり。而るを是非を論ぜず親の命に随ひ、邪正を簡(えら)ばず主の仰せに順(したが)はんと云ふ事、愚癡の前には忠孝に似たれども、賢人の意には不忠不孝是に過ぐべからず。されば教主釈尊は転輪聖王(てんりんじょうおう)の末、師子頰王(きょうおう)の孫、浄飯王(じょうぼん)の嫡子として五天竺の大王たるべしといへども、生死無常の理をさとり出離解脱の道を願ひて世を厭(いと)ひ給ひしかば、浄飯大王是を歎き、四方に四季の色を顕はして太子の御意を留め奉らんと巧(たく)み給ふ。先づ東には霞たなびくたえまより、かりがねこしぢに帰り、窓の梅の香玉簾(たますだれ)の中にかよひ、嫋嫋(でうでう)たる花の色、もゝさへづりの鶯(うぐいす)春の気色を顕はせり。南には泉の色白たへにして、かの玉川の卯(う)の華、信太(しのだ)の森のほとゝぎす夏のすがたを顕はせり。西には紅葉常葉(もみじときわ)に交はればさながら錦(にしき)をおり交へ、荻(おぎ)ふく風閑(のど)かにして松の嵐ものすごし。過ぎにし夏のなごりには、沢辺に見ゆる蛍の光、あまつ空なる星かと誤まり、松虫鈴虫の声々涙

を催せり。北には枯野の色いつしかものうく、池の汀(なぎさ)につら氷(ゝ)ぬて谷の小川も音(を)と寂(さび)ぬ。かゝるありさまを造りて御意をなぐさめ給ふのみならず、四門に五百人づつの兵を置きて守護し給ひしかども、終(つい)に太子の御年十九と申せし二月八日の夜半の比(ころ)、車匿(しゃのく)を召して金泥駒(こんでいこま)に鞍(くら)置かせ、伽耶(がや)城を出でて檀特山(だんどくせん)に入り十二年、高山に薪(たきぎ)をとり深谷(みさわ)に水を結んで難行苦行し給ひ、三十成道の妙果を感得して、三界の独尊一代の教主と成りて、父母を救ひ群生(ぐんじょう)を導き給ひしをば、さて不孝の人と申すべきか。仏を不孝の人と云ひしは九十五種の外道なり。父母の命に背きて無為(むい)に入り、還りて父母を導くは孝の手本なる事、仏其の証拠なるべし。彼の浄蔵・浄眼は父の妙荘厳王、外道の法に著して仏法に背き給ひしかども、二人の太子は父の命に背きて雲雷音王仏(うんらいおんのうぶつ)の御弟子となり、終に父を導きて沙羅樹王仏(しゃらじゅ)と申す仏になし申されけるは不孝の人と云ふべきか。経文には「恩を棄てゝ無為に入るは真実に恩を報ずる者」と説いて、今生の恩愛をば皆捨てゝ仏法の実の道に入る、是実に恩をしれる人なりと見えたり。又主君の恩の深き事汝よりも能くしれり。汝若し知恩の望あらば深く諫め強ひて奏せよ。非道にも主命に随はんと云ふ事、佞臣(ねいしん)の至り不忠の極まりなり。殷(いん)の紂王(ちゅう)は悪王、比干(ひかん)は忠臣なり。政事(まつりごと)理に違ひしを見て、強ひて諫めしかば即ち比干は胸を割(さ)かる。紂王は比干死して後、周の王に打たれぬ。今の世までも比干は忠臣といはれ、紂王は悪王といはる。夏(か)の桀王(けつおう)を諫めし竜蓬(りゅうほう)は頭をきられぬ。されども桀王は悪王、竜蓬は忠臣ぞと云ふ。主君を三度諫むるに用ゐずば山林に交はれとこそ教へたれ。何ぞ其の非を見ながら黙せんと云ふや。古の賢人世を遁れて山林に交はりし先蹤(せんしょう)を集めて、聊(いささか)汝(なじ)が愚耳に聞かしめん。殷(いん)の代の太公望は磻溪(はんけい)と云ふ谷に隠る。周の代の伯夷(はくい)・叔斉(しゅくせい)は首陽山(しゅようさん)と云ふ山に籠(こも)る。秦(しん)の綺里季(きりき)は商洛山(しょうらくさん)に入り、漢の厳光(げんこう)は孤亭(こてい)に居し、晋(しん)の介子綏(かいしすい)は綿上山(めんじょうさん)に隠れぬ。此等をば不忠と云ふべきか。愚かなり、汝忠を存ぜば諫むべし、孝を思はゞ言ふべきなり。先づ汝権教権宗の人は多く此の宗の人は少なし、何ぞ多きを捨て少なきに付くと云ふ事、必ず多きが尊くして少なきが卑しきにあらず。賢善の人は希に愚悪の者は多し。麒麟(きりん)・鸞鳳(らんほう)は禽獣(きんじゅう)の奇秀なり。然れども是は甚だ少なし。牛羊烏鴿(ごよううごう)は畜鳥の拙卑(せっぴ)なり。されども是は転(うたた)多し。必ず多きがたっとくして少なきがいやしくば、麒麟をすてゝ牛羊をとり、鸞鳳を閣(さしお)いて烏鴿をとるべきか。摩尼金剛(まにこんごう)は金石の霊異なり。此の宝は乏しく、瓦礫(がりゃく)土石は徒物(いたづらもの)の至り、是は又巨多(こた)なり。汝が言の如くならば、玉なんどをば捨てゝ瓦礫(がりゃく)を用ゆべきか。はかなしはかなし。聖君は希(まれ)にして千年に一たび出で、賢佐は五百年に一たび顕はる。摩尼は空しく名のみ聞く、麟鳳(りんぽう)誰か実を見たるや。世間・出世善き者は乏しく悪き者は多き事眼前なり。然れば何ぞ強(あなが)ちに少なきをおろかにして多きを詮とするや。土沙は多けれども米穀は希なり。木皮は充満すれども布絹は些少(さしょう)なり。汝只正理を以て前(さき)とすべし。別して人の多きを以て本とすることなかれ。

爰に愚人席をさり袂をかいつくろひて云はく、誠に聖教の理をきくに、人身は得難く、天上の糸筋の海底の針に貫けるよりも希に、仏法は聞き難くして、一眼の亀の浮木に遇ふよりも難し。今既に得難き人界に生をうけ、値ひ難き仏教を見聞しつ、今生をもだしては又何れの世にか生死を離れ菩提を証すべき。夫一劫受生の骨は山よりも高けれども、仏法の為にはいまだ一骨をもすてず。多生恩愛の涙は海よりも深けれども、尚後世の為には一滴をも落さず。拙きが中に拙く愚かなるが中に愚かなり。設ひ命をすて身をやぶるとも、生を軽くして仏道に入り、父母の菩提を資け、愚身が獄縛をも免るべし。能く能く教を示し給え。抑法華経を信ずる其の行相如何。五種の行の中には先づ何れの行をか修すべき。丁寧に尊教を聞かんことを願ふ。聖人示して云はく、汝蘭室の友に交はりて麻畝の性と成る。誠に禿樹禿に非ず春に遇ふて栄え華さく。枯草枯るに非ず夏に入りて鮮かに注ふ。若し先非を悔ひて正理に入らば、湛寂の潭に遊泳して無為の宮に優遊せん事疑ひなかるべし。抑仏法を弘通し群生を利益せんには、先づ教・機・時・国・教法流布の前後を弁ふべきものなり。所以は時に正像末あり、法に大小乗あり、修行に摂折あり。摂受の時折伏を行ずるも非なり。折伏の時摂受を行ずるも失なり。然るに今世は摂受の時か折伏の時か先づ是を知るべし。摂受の行は此の国に法華一純に弘まりて、邪法邪師一人もなしといはん、此の時は山林に交はりて観法を修し、五種六種乃至十種等を行ずべきなり。折伏の時はかくの如くならず、経教のおきて蘭菊に、諸宗のおぎろ誉れを擅にし、邪正肩を並べ大小先を争はん時は、万事を閣いて謗法を責むべし、是折伏の修行なり。此の旨を知らずして摂折途に違はゞ得道は思ひもよらず、悪道に堕つべしと云ふ事、法華・涅槃に定め置き、天台・妙楽の解釈にも分明なり。是仏法修行の大事なるべし。譬へば文武両道を以て天下を治むるに、武を先とすべき時もあり、文を旨とすべき時もあり。天下無為にして国土静かならん時は文を先とすべし。東夷・南蛮・西戎・北狄蜂起して、野心をさしはさまんには武を先とすべきなり。文武のよき事計りを心えて時もしらず、万邦安堵の思ひをなして世間無為ならん時、甲冑をよろひ、兵杖をもたん事も非なり。又王敵起こらん時、戦場にして武具をば閣いて、筆硯を提ん事、是も亦時に相応せず。摂受折伏の法門も亦是くの如し。正法のみ弘まて邪法邪師無からん時は、深谷にも入り、閑静にも居して、読誦書写をもし、観念工夫をも凝らすべし。是天下の静なる時筆硯を用ゆるが如し。権宗謗法国にあらん時は、諸事を閣いて謗法を責むべし。是合戦の場に兵杖を用ゆるが如し。然れば章安大師涅槃の疏に釈して云はく「昔は時平かにして法弘まる、戒を持すべし杖を持すること勿れ。今は時嶮しくして法翳る。杖を持すべし戒を持すること勿れ。今昔倶に嶮しくば倶に杖を持すべし、今昔倶に平かならば倶に戒を持すべし。取捨宜きを得て一向にすべからず」と此の釈の意分明なり。昔は世もすなおに人もたゞしくして邪法邪義無かりき。されば

威儀をたゞし、穏便に行業を積みて、杖をもて人を責めず、邪法をとがむる事無かりき。今の世は濁世なり、人の情もひがみゆがんで権教謗法のみ多ければ正法弘まりがたし。此の時は読誦・書写の修行も観念・工夫・修練も無用なり。只折伏を行じて力あらば威勢を以て謗法をくだき、又法門を以ても邪義を責めよとなり。取捨其の旨を得て一向に執する事なかれと書けり。今の世を見るに正法一純に弘まる国か、邪法の興盛する国か勘ふべし。然るを浄土宗の法然は念仏に対して法華経を捨閉閣抛とよみ、善導は法華経を雑行と名づけ、剰へ千中無一とて千人信ずとも一人得道の者あるべからずと書けり。真言宗の弘法は法華経を華厳にも劣り、大日経には三重の劣と書き、戯論の法と定めたり。正覚房は法華経は大日経のはきものとりにも及ばずと云ひ、釈尊をば大日如来の牛飼ひにもたらずと判ぜり。禅宗は法華経は吐きたるつばき、月をさす指、教網なんど下す。小乗律等は法華経は邪教、天魔の所説と名づけたり。此等豈謗法にあらずや。責めても猶あまりあり、禁めても亦足らず。

愚人云はく、日本六十余州人替はり法異なりといへども、或は念仏者或は真言師或は禅或は律、誠に一人として謗法ならざる人はなし。然りと雖も人の上沙汰してなにかせん。只我が心中に深く信受して、人の誤りをば余所の事にせんと思ふ。聖人示して云はく、汝が言ふ所実にしかなり。我も其の義を存ぜし処に、経文には或は不惜身命とも或は寧喪身命とも説く。何故にかやうには説かるゝやと存ずるに、只人をはゞからず経文のまゝに法理を弘通せば、謗法の者多からん世には必ず三類の敵人有りて命にも及ぶべしと見えたり。其の仏法の違目を見ながら我もせめず国主にも訴へずば、教へに背きて仏弟子にはあらずと説かれたり。涅槃経第三に云はく「若し善比丘あって法を壊らん者を見て置いて呵責し駈遣し挙処せずんば、当に知るべし是の人は仏法中の怨なり。若し能く駈遣し呵責し挙処せば、是我が弟子真の声聞なり」と。此の文の意は仏の正法を弘めん者、経教の義を悪しく説かんを聞き見ながら我もせめず、我が身及ばずば国主に申し上げても是を対治せずば、仏法の中の敵なり。若し経文の如くに、人をもはゞからず、我もせめ、国主にも申さん人は、仏弟子にして真の僧なりと説かれて候。されば仏法中怨の責めを免れんとて、かやうに諸人に悪まるれども命を釈尊と法華経に奉り、慈悲を一切衆生に与へて、謗法を責むるを心えぬ人は口をすくめ眼を瞋らす。汝実に後世を恐れば身を軽しめ法を重んぜよ。是を以て章安大師云はく「寧ろ身命を喪ふとも教を匿さゞれとは、身は軽く法は重し身を死して法を弘めよ」と。此の文の意は身命をばほろぼすとも正法をかくさゞれ。其の故は身はかろく法はおもし、身をばころすとも法をば弘めよとなり。悲しいかな生者必滅の習ひなれば、設ひ長寿を得たりとも終には無常をのがるべからず。今世は百年の内外の程を思へば夢の中の夢なり。悲想の八万歳未だ無常を免れず。忉利の一千年も猶退没の風に破らる。況んや人間閻浮の習ひは露

よりもあやうく、芭蕉よりももろく、泡沫よりもあだなり。水中に宿る月のあるかなきかの如く、草葉にをく露のをくれさきだつ身なり。若し此の道理を得ば後世を一大事とせよ。歓喜仏の末の世の覚徳比丘正法を弘めしに、無量の破戒の此の行者を怨みて責めしかば、有徳国王正法を守る故に、謗法を責めて終に命終して阿閦仏の国に生まれて彼の仏の第一の弟子となる。大乗を重んじて五百人の婆羅門の謗法を誡めし仙予国王は不退の位に登る。憑しいかな、正法の僧を重んじて邪悪の侶を誡むる人、かくの如くの徳あり。されば今の世に摂受を行ぜん人は、謗人と倶に悪道に堕ちん事疑ひ無し。南岳大師の四安楽行に云はく「若し菩薩有りて悪人を将護し治罰すること能はず。乃至其の人命終して諸悪人と倶に地獄に堕せん」と。此の文の意は若し仏法を行ずる人有って、謗法の悪人を治罰せずして観念思惟を専らにして邪正権実をも簡ばず、詐って慈悲の姿を現ぜん人は諸の悪人と倶に悪道に堕つべしと云ふ文なり。今真言・念仏・禅・律の謗人をたゞさず、いつはて慈悲を現ずる人此の文の如くなるべし。

爰に愚人意を竊かにし言を顕はにして云はく、誠に君を諫め家を正しくする事先賢の教へ本文に明白なり。外典此くの如し、内典是に違ふべからず。悪を見ていましめず謗を知ってせめずば、経文に背き祖師に違せん。其の禁め殊に重し。今より信心を至すべし。但し此の経を修行し奉らん事叶ひがたし。若し其の最要あらば証拠を聞かんと思ふ。聖人示して云はく、今汝の道意を見るに鄭重慇懃なり。所謂諸仏の誠諦得道の最要は只是妙法蓮華経の五字なり。檀王の宝位を退き、竜女が蛇身を改めしも只此の五字の致す所なり。夫以れば今の経は受持の多少をば一偈一句と宣べ、修行の時刻をば一念随喜と定めたり。凡そ八万宝蔵の広きも一部八巻の多きも、只是の五字を説かんためなり。霊山の雲の上、鷲峰の霞の中に、釈尊要を結び地涌付嘱を得ることありしも法体は何事ぞ、只此の要法に在り。天台・妙楽の六千張の疏玉を連ぬるも、道邃・行満の数軸の釈金を並ぶるも、併ら此の義趣を出でず。誠に生死を恐れ涅槃を欣ひ信心を運び渇仰を至さば、遷滅無常は昨日の夢、菩提の覚悟は今日のうつゝなるべし。只南無妙法蓮華経とだにも唱へ奉らば滅せぬ罪や有るべき、来たらぬ福や有るべき。真実なり甚深なり、是を信受すべし。

愚人掌を合はせ膝を折って云はく、貴命肝に染み、教訓意を動かせり。然りと雖も上能兼下の理なれば、広きは狭きを括り多は少を兼ぬ。然る処に五字は少なく文言は多し、首題は狭く八軸は広し。如何ぞ功徳斉等ならんや。聖人云はく、汝愚かなり。捨少取多の執須弥よりも高く、軽狭重広の情溟海よりも深し。今の文の初後は必ず多きが尊く、少なきが卑しきにあらざる事、前に示すが如し。爰に又小が大を兼ね、一が多に勝ると云ふ事之を談ぜん。彼の尼拘類樹の実は芥子三分が一のせいなり、されども五百輌の車を隠す徳あり。是小が大を含めるにあらずや。又如意宝珠は一つあれども万宝を雨

して欠くる処之無し。是又少が多を兼ねたるにあらずや。世間のことわざにも一は万が母といへり。此等の道理を知らずや。所詮実相の理の背契を論ぜよ。強ちに多少を執する事なかれ。汝至って愚かなり、今一の譬へを仮らん。夫妙法蓮華経とは一切衆生の仏性なり。仏性とは法性なり。法性とは菩提なり。所謂釈迦・多宝・十方の諸仏、上行・無辺行等、普賢・文珠・舎利弗・目連等、大梵天王・釈提桓因・日月・明星・北斗七星・二十八宿・無量の諸星・天衆・地類・竜神八部・人天大会・閻魔法王、上は悲想の雲の上、下は那落の炎の底まで、所有一切衆生の備ふる所の仏性を妙法蓮華経とは名づくるなり。されば一遍此の首題を唱へ奉れば、一切衆生の仏性が皆よばれて爰に集まる時、我が身の法性の法報応の三身ともにひかれて顕はれ出づる、是を成仏とは申すなり。例せば籠の内にある鳥の鳴く時、空を飛ぶ衆鳥の同時に集まる、是を見て籠の内の鳥も出でんとするが如し。

爰に愚人云はく、首題の功徳、妙法の義趣今聞く所詳らかなり。但し此の旨趣正しく経文に是をのせたりや如何。聖人云はく、其の理詳らかならん上は文を尋ぬるに及ばざるか。然れども請ひに随って之に示さん。法華経第八陀羅尼品に云はく「汝等但能く法華の名を受持せん者を擁護せんすら福量るべからず」と。此の文の意は仏、鬼子母神・十羅刹女の法華経の行者を守らんと誓ひ給ふを讃るとして、汝等法華の首題を持つ人を守るべしと誓ふ、其の功徳は三世了達の仏の智慧も尚及びがたしと説かれたり。仏智の及ばぬ事何かあるべき、なれども法華の題名受持の功徳ばかりは是を知らずと宣べたり。法華一部の功徳は只妙法等の五字の内に籠れり。一部八巻文々ごとに、二十八品生起かはれども首題の五字は同等なり。譬へば日本の二字の中に六十余州島二つ入らぬ国やあるべき、籠らぬ郡やあるべき。飛鳥とよべば空をかける者と知り、走獣といへば地をはしる者と心うる。一切名の大切なる事蓋し以て是くの如し。天台は名詮自性・句詮差別とも、名者大綱とも判ずる此の謂れなり。又は名は物をめす徳あり、物は名に応ずる用あり。法華題名の功徳も亦以て是くの如し。

愚人云はく、聖人の言の如くば実に首題の功莫大なり。但知ると知らざるとの不同あり。我は弓箭に携はり、兵杖をむねとして末だ仏法の真味を知らず。若し然れば得る所の功徳何ぞ其れ深からんや。聖人云はく、円頓の教理は初後全く不二にして初位に後位の徳あり。一行一切行にして功徳備はらざるは之無し。若し汝が言の如くば、功徳を知って植えずんば、上は等覚より下は名字に至るまで得益更にあるべからず。今の経は唯仏与仏と談ずるが故なり。譬喩品に云はく「汝舎利弗尚此の経に於ては信を以て入ることを得たり。況んや余の声聞をや」と。文の心は大智舎利弗も法華経には信を以て入る、其の智分の力にはあらず。況んや自余の声聞をやとなり。されば法華経に来たって信ぜしかば、永不成仏の名を削りて華光如来となり。嬰児に乳をふくむるに、其の味

をしらずといへども自然に其の身を生長す。医師が病者に薬を与ふるに、病者薬の根源をしらずといへども服すれば任運と病愈ゆ。若し薬の源をしらずと云ひて、医師の与ふる薬を服せずば其の病愈ゆべしや。薬を知るも知らざるも服すれば病の愈ゆる事以て是同じ。既に仏を良医と号し法を良薬に譬へ衆生を病人に譬ふ。されば如来一代の教法を擣篩和合して妙法一粒の良薬に丸せり。豈知るも知らざるも服せん者煩悩の病ひ愈えざるべしや。病者は薬をもしらず病をも弁へずといへども服すれば必ず愈ゆ。行者も亦然なり。法理をもしらず煩悩をもしらずといへども、只信ずれば見思・塵沙・無明の三惑の病を同時に断じて、実報寂光の台にのぼり、本有三身の膚を磨かん事疑ひあるべからず。されば伝教大師云はく「能化所化倶に歴劫無く、妙法経力即身成仏す」と。法華経の法理を教へん師匠も、又習はん弟子も、久しからずして法華経の力をもて倶に仏になるべしと云ふ文なり。天台大師も法華経に付いて玄義・文句・止観の三十巻の釈を造り給ふ。妙楽大師は又釈籤・疏記・輔行の三十巻の末文を重ねて消釈す。天台六十巻とは是なり。玄義には、名体宗用教の五重玄を建立して妙法蓮華経の五字の功能を判釈す。五重玄を釈する中の宗の釈に云はく「綱維を提ぐるに目として動かざること無く、衣の一角を牽くに縷として来たらざること無きが如し」と。意は此の妙法蓮華経を信仰し奉る一行に、功徳として来たらざる事なく、善根として動かざる事なし。譬へば網の目無量なれども、一つの大綱を引くに動かざる目もなく、衣の糸筋巨多なれども、一角を取るに糸筋として来たらざることなきが如しと云ふ義なり。さて文句には、如是我聞より作礼而去まで文々句々に因縁・約教・本迹・観心の四種の釈を設けたり。次に止観には、妙解の上に立つる所の観不思議境の一念三千、是本覚の立行本具の理心なり、今爰に委しくせず。悦ばしいかな、生を五濁悪世に受くるといへども、一乗の真文を見聞する事を得たり。熙連恒沙の善根を致せる者、此の経にあひ奉りて信を取ると見えたり。汝今一念随喜の信を致す、函蓋相応・感応道交疑ひ無し。

愚人頭を低れ手を挙げて云はく、我今よりは一実の経王を受持し、三界の独尊を本師として、今身より仏身に至るまで此の信心敢へて退転すること無けん。設ひ五逆の雲厚くとも、乞ふ、提婆達多が成仏を続ぎ、十悪の波あらくとも、願はくは王子覆講の結縁に同じからん。聖人云はく、人の心は水の器にしたがふが如く、物の性は月の波に動くに似たり。故に汝当座は信ずといふとも後日は必ず翻へさん。魔来たり鬼来たるとも騒乱する事なかれ。夫天魔は仏法をにくむ、外道は内道をきらふ。されば猪の金山を摺り、衆流の海に入り、薪の火を盛んになし、風の求羅をますが如くせば、豈好き事にあらずや。